

ように、ぴっかりカフェは、多様な価値観やロールモデルに出会えるとともに、生徒の目を外の世界に向けさせ、将来の展望を与える効果も持つ居場所として機能している。

また、学校にとっても、生徒が地域の人とつながることで、学校が地域で理解され、信頼できる存在となることを助けるものと期待している。

【考察】

学校には進路や交友・生活上の悩みに関して相談を受け付ける相談室が設置されていることが多いが、生徒にとって必ずしも相談しやすいものとなっていない場合もあるのではないだろうか。また、生徒にとって学校が必ずしも居場所として認知されていない場合には、困難やつまづきに直面した生徒は中退等の形で比較的容易に学校から離れてしまうことも懸念される。

同校では、家庭を生徒にとっての第1の居場所、学校を第2の居場所、地域を第3の居場所と捉え、ぴっかりカフェを、第1、第2、第3のどの居場所でもない、学校と地域社会の間の「第2.5の居場所」と位置付けている。

この第2.5の居場所は、生徒を学校につなぎとめるとともに、学校の普段のカリキュラムでは得られない地域の人との触れ合いがあるなど、生徒の他者との関わりを拡大させ、学校外の社会の多様性を学ぶ場としての機能を有している。家庭、学校、地域社会以外の中間的な居場所を学校内に創出するこの取組は、若者の孤立を未然に防ぐ取組として有効であると考えられる。

(2) 若者の居場所・出番づくりを地域で支える取組

～NPO法人 With優「会員制居酒屋 結」～

NPO法人「With優」は主に山形県置賜地域を活動の対象としており、学校に行けない・行かないことを選択した若者、今の社会の中で生きにくさを抱えた若者等の自立支援を中心に、地域のどんな人も自分らしく、いきいきと幸せに生きていけるような地域社会を目指して活動している。

同法人は、長い間仕事に就いていなかったり、自宅にいてなかなか社会に出られなくなっていたりする若者、高校等の学校に行きづらくなっていたり、行けなくなっていたりする若者を対象に、相談やジョブトレーニング、様々な自立支援プログラムを通して、就労支援、復学・転学支援を実施している。

家の外に居場所がなく、他人とコミュニケーションをとる機会が少ない者については、ますます社会から疎遠となってしまうことが懸念される。このような若者の就業支援のために、同法人は居酒屋での就労支援という形態を選択し、「会員制居酒屋 結」を立ち上げた。

結は、一度も就労経験のない若者やなかなか社会に一步を踏み出せない若者が、就労に向けた訓練の機会を持つための場であり、この趣旨を理解し、応援してくれる人が会員になって利用する。居酒屋であれば、比較的容易に客とのコミュニケーションの機会が確保されるとともに、会話の中から社会生活を送るために必要なソーシャルスキルも学ぶことができる。また、コミュニケーションが苦手な若者については、まずはバックヤードで調理や皿洗いなどを担当するなど、当事者の状況に応じて、訓練の内容を調整することができる。特に、同店を訪れる客は事業の趣旨を理解した上で会員になる仕組みをとっているため、対人サービスで生じがちなお客様と従業員との間の問題を回避することができる。このような環境が、同店で訓練を受ける若者が安心して社会につながるための準備の場所として機能することにつながっていると考えられる。結での中間就労は、最も成長を感じることができる訓練だとして



(結の様子)

若者に人気があり、実績のあるプログラムになっている。平成25（2013）年2月の立ち上げからこれまでに結を巣立った若者は35名、また、平成29（2017）年3月時点の会員数は3,750名に上っている。

【考察】

無業者である若者のうち、特に就労経験のない者については、社会体験の意味合いを持つ活動への参加など、雇用対策に限定されない幅広い支援が必要であると言われる。

この事例では、就労を目指す若者が地域の人との交流を通じて自信をつけ、自立に向けた準備を整えることができている。そこでは、就労支援トレーニングの機会を提供する者と提供される若者を集めた場の整備にとどまらず、自立を目指す若者を温かく見守り、地域社会の一員として育てていくコミュニティが徐々に形成されてきていると考えられる。

(3) 地域の人々の集まりの場へと発展する子供食堂の取組 ～兵庫県尼崎市^{かわらのみや}瓦宮「そのっこ夕やけ食堂」～

子供の貧困対策として、近年急速に子供食堂の設置が増加している。兵庫県尼崎市園田地区の社会福祉協議会やボランティアサークル、社会福祉法人、小学校PTAなどで構成された「園田地区子育て支援連絡会」が中心となって運営している子供食堂「そのっこ夕やけ食堂」もその一つである。



（そのっこ夕やけ食堂の様子）

家庭の事情で食事がままならない子供の支援を目的として始まった「そのっこ夕やけ食堂」は、子供食堂＝貧困というイメージにより、本当に支援が必要な子供（家庭）が利用を躊躇するのでは

ないかとの思いから、「地域の誰もが参加できる食を通じた居場所」というコンセプトを打ち出し、学校なども含め地域の人々に周知をした上で取り組んでいる。

「そのっこ夕やけ食堂」は、一人暮らしの高齢者など大人の参加も可能であるため、貧困などの問題を抱えている子供に限らず、幅広い年齢層の地域の人々が集まる場となっている。現在、週1回の運営をしており、小・中学生で配膳などのお手伝いをする子供は無料、高校生以上の大人は300円である。回を重ねるごとに、食を通じた居場所を超えて、様々な機能を持つ地域の居場所としての役割を担うようになってきている。

具体的には、子供たちにとっては近隣の大学生から学習支援を受ける場であり、若い子育て中の親にとっては子育ての悩みを相談できる相手を見つけられる場であり、さらに、一人暮らしの高齢者には話し相手を見つけられる場となるなど、地域の人々がお互いに知り合い、助け合い、支え合うことのできる交流の場へと進化している。

【考察】

学校やPTAなど教育関係者と福祉関係団体等が互いにうまく連携・協力した事例である。子供食堂が、子供への食事の提供の場にとどまらず、若者から高齢者までも含めた幅広い年齢層の人が集まる交流の場へと発展していく様子がうかがえる。その際、子供たちを配膳などのお手伝いに協力させることで、子供たちの社会性を育む視点を取り入れているなど、様々な世代をつなぎ、地域におけるネットワークの構築に貢献するよう、子供食堂の運営に工夫がなされている。このような子供食堂は、子供たちを支援し力づけるだけでなく、その地域で生活する様々な人々を緩やかにつなぎ、地域の人々を孤立から守る拠点となる可能性を持つ取組でもある。